

## 感覚環境のまちづくりフォーラム in 静岡市（平成 21 年 10 月 4 日（日））

### 基調講演「五感と身体から感じるまちづくり」

滋賀県立大学環境科学部准教授 / NPO 法人五環生活代表理事 近藤隆二郎氏

皆さん、おはようございます。素晴らしい水墨画と香りによって、皆さん既に五感のいろいろな刺激を受けられたことと思います。私は、「五感と身体から感じるまちづくり」というテーマでお話をさせていただきます。私は、滋賀県立大学というところにおり、また、NPO 五環生活というところで、五感に注目してまちづくりを行う様々な活動を実践しております。本日は、皆さんにそのすべて分かっていただくというよりも、どこかヒントになるようなものを見つけていただければ幸いです。

最初に、なぜ五感・身体なのかということをお話しします。地球環境問題はもう皆さんご存じかと思いますが、まちづくりはこの問題と切り離すことができません。まちに目を移すと様々な問題が出てきています。地縁が希薄化し、ソーシャルキャピタル（人間関係資本）と呼ばれる色々なつながりがだんだん希薄になってきました。これは、環境問題にとって非常に大きなことです。

なぜかという、これまでの私たちの便利な暮らしは、一方で、隣人とつながりがなくてもよいように作られてきましたが、今度はお隣さんとも協力し合わないといけなくなります。例えば、現在皆さんが車を各自 1 台持っているのをシェアしていかなければならなくなるとうすると、お隣さんとの関係がないとうまくいきません。このように、コミュニティの力が非常に重要になってくると思います。

さらに身体の問題が入ってきています。私たちの身体・感覚は、若い世代を見ていると退化してきているように思います。特に若者と五感ということでは、KY といわれるような学生も出てきています。また、失敗や傷つくといったことを異常に恐れます。それから、最短距離が好きですね。「先生、これどうしたらいいですか。」と、言われたことだけをやる。自分で失敗することを避けていきます。多分、大事に大事に育てられてきたのだらうと思います。このようにつながりが薄くなっている世代が出てきていると思いますが、そのような中で、この五感・感覚というものは、一つの重要な突破口になるのではないかと考えています。頭を使い過ぎた私たち。それは大学も悪いですね。入試制度があつて、頭だけを使うようにしてきています。結局、受験勉強しかせずに大学に入ったので、改めて現場に戻すといったこともしています。

一方、まちづくりの方もどんどん変わってきています。今までのまちづくりはトップダウンで行われてきましたが、現在は変わりつつあり、大きな設計図があってそこに当てはめるのではなく、それぞれの様々な取組が積み上がってまちができていくという形になってきています。

インドに Auroville という 40 年続いているエコビレッジがありますが、そこはリーダーもいないし、設計図もありません。みんながそれぞれ自分のやることを見つけながらやっていき、それで全体のまちが成り立って 40 年間も続いています。そのようなまちづくりにおいては、個人の身体が中心となって地域へとつながっていく、つまり、自分の感覚を中心にしないとそういうまちはできないということだと思います。

私たちの活動の一つの事例ですが、「未来予想絵図」というものを作っています。これはワークショップ形式で行うものですが、ベースの地図に、関係する NPO や団体が自分たちの未来でどういうことをやろうとしているのかをアイコンの絵で書いてもらい、最終的には、話し合いをしながら、みんなでこういうまちを目指しましょうという図を作ります。というのも、それぞれの NPO は専門性を持っているので、自分のところの将来図を描けますが、その隣との関係が見えませんので、そのつながりを作るための一つの仕組みになります。

五感に戻りますと、オルフェウス楽団というのがあるのですが、この楽団には指揮者がおらず、それぞれのメンバーが協調しながら一つの音楽をつくっていっています。これは、オルフェウスプロセスというシステム論で注目されていますが、ここで大事なのは強いリーダーではなく、みんながそれぞれ自分のことを他の人に伝えていく「相互編集」という形でつながっていることです。

また身体に戻りますが、先ほどお話ししましたように若い世代を見ていると、身体の危機、特に押しくらまんじゅうのような身体と身体がぶつかり合う経験がされてきておらず、異常にそれを怖がるというようなことがあります。そういう中で、実践を通じて五感を刺激するようなプロジェクトを現在色々行っております。

1 つのヒントとしては、祭り、掃除、共同作業などが挙げられます。みんなで共同して掃除をするというのはとても大事なことです。お祭り、御神輿もそうです。そのように、身体で共同のことをするというのは本当に大事です。つまり、まちづくりをするときには、頭で話す以前に、みんなで掃除しようよとか、みんなで歩こうよとか、ということが最初の一步として非常に大事です。

現在、地縁が切れてきており、自治会に入らないといったことも問題になっていると思います。みんなで様々な作業をするというのは、非常に重要な意味があると思います。ある意味強制的に

なっても、子供たちをそこに参加させるというのは良いことだと思います。

私たちは「近江ワザ回廊」というものもやっています。実は職人さんが現在危機を迎えています。現在はまだ70、80歳の職人さんがご存命ですけれども、この世代は、自分の手で色々なものを作ることができた世代です。

例えば、桶風呂というものがありますが、これは桶で風呂を作ります。高度成長期に入ってホーローのバスが入ってきたので、桶という文化はもはや皆さんの家にはないのではないかと思います。

この世代はだんだんお亡くなりになる方が増える世代になってきており、ではその石油製品を買えなくなったときに私たちがまた桶を作れるのか。それを伝承するところが今ちょうど切れそうになっています。それが一番恐ろしい。私たちの身体が持っていた技が、世代としてプツッと切れる。もう一回その職人さんに教を請いたいという世代になると、もう職人さんはいない。今は売れないということで、当然この職人さんたちは次の世代に技を渡していません。こんな食えない仕事はやるなということで、息子さんはサラリーマンになり、次世代はプツリ切れています。そのような中で、この職人さんたちの展示会として、等身大の飛び出す絵本というものを作りました。このように職人さんたちを見せる形で若い世代につないでいくということをしています。

こちらの図にありますように、心と知があるけれども、身が抜けてしまっていますので、そこをつなぐことが今身体において重要かと思っています。

ここに「地球にやさしいモデル」と「身体にやさしいモデル」というのを提示していますが、現在私たちは地球温暖化の問題で様々な行動をしようとしています。これは私が名づけた「地球にやさしいモデル」というものですが、まず地球があり、何とかしなければならないということで、例えば氷山が崩れる映像などを見たりします。次に地域があつて、産地があつて、食べ物があつて、身体となりますが、ここまでくると最初の地球のイメージが薄くなってしまいます。地球のイメージはすごいなとカップラーメンを食べながら見るというか、自分の暮らしと身体とがつながっていないのです。そのため、持続性がない。

もう一つは「身体にやさしいモデル」で、これは自分の身体から入ります。マクロビオティックをされている穀物菜食の人たちに環境意識を聞いたところ、まず病気から入ります。自分の身体はおかしい。それはなぜかということで食べ物を調べます。その産地はどこか、自分の食べ物を見直してみよう。すると、それは地域環境になって、最後は地球に到着します。こちらのモデルは持続します。自分の身体が出発点ですから、身体のためにやり続けます。そういう実践をし

ている人たちの意見を聞いたところ、「穀物菜食というものを、初めは健康目的で始めたけれども、続けていく中でライフスタイルが変わっていきます。食が正しくなれば判断力が冴える。」とか、「地球環境を考えてというよりも自分の身体のために始めました。でも、身体が健康になって精神が健康になって感性が磨かれていくと、おのずと悪いものや自然でないものには触れたくなくなる。」といった感想が出てきています。

つまり、地球から始めるのではなく自分の身体に聞いてみる。多分私たちの身体は悲鳴を上げていっている部分があると思いますので、それを素直に聞いていくと地球につながっていくのだろうと思います。そういうやり方でないと、私たちの暮らしも変わっていかないと思っています。

それでは、五感に着目して様々なことをやってきておりますので、具体的にご紹介していきたいと思います。

まず、五感マップというものをやってきました。私は以前、和歌山大学にいましたので、世界遺産として有名な熊野古道でやりました。熊野古道を五つのグループに分かれて歩いていただき、そこから五感に応じた地図を描いていただきました。例えばこれは触覚の地図です。実は、この地図を発行しようとしたのですが、出版社に断られました。なぜかという、客観情報ではないからです。その感覚が非常にいいというのが誰が行っても再現できるという確実性がない。売られている地図は再現性が絶対ですよね。お店が紹介されていてそこがおいしいといっても、行ったらなかったのでは地図の役目は果さない。この五感マップは主観によるものですので、地図には日にちと名前を入れてもらい、だれがそこで得た情報かということを重要にしています。

事例を紹介しますと、例えばこの発心門王子というところで、視覚についてはこういう景色がいいとか、聴覚では、カラスの声や、ウグイス、メジロなどがあります。触覚は、一番皆さんがやりたがらない。どうしたらいいのか一番難しいからですが、例えば落ち葉が重なったふわふわした感覚などがあります。熊野古道の魅力は、実は歴史の知識だけではないのです。

私が不満だったのは、どこへいっても熊野古道は郷土史家しか出てこない。つまり知識です。もちろん歴史は楽しいのですが、熊野古道の魅力はそれだけではなく、ふかふかした落ち葉が重なった、その足裏の感覚というものがとても魅力なのです。

ところが、そういう五感から見た熊野古道の魅力をだれも押さえていないから、整備をどうするかというときには軸がずれてしまい、妙な整備をしてしまう。熊野古道の本当の魅力は実はふかふかした地道なのです。それは言葉にはなっていませんが、熊野古道にずっと通っていた人たちはみんな知っているのです。

次は嗅覚ですが、これは非常に世代差が出ました。学生とおじいちゃんが歩くと全く会話が通

じない。「この匂いわかるか?」、「しません。」。「その匂いは腐葉土だけど分かるか?」、「分かりません。」。多分嗅覚が、私たちの世代において一番退化していると思います。抗菌がブームになるように、くさいにおいは暮らしの中ですごく嫌がられていますね。しかし、くさいにおいは嗅覚の幅を広げますから、生活が非常にクリーンなものになってしまうと、嗅覚自体の能力の幅が狭まってきてしまうのではないかなと思います。

これらを重ねると、このような五感マップになってきます。これを15年ぐらい前からやってきました。ほかの場所でもこういう感じに重ねていっています。これは、熊野古道の魅力というのが五感から見たらどうなのか、歴史だけではなく、空間としても大切に保全していこうということをやっています。

また、熊野古道と別に、「五感ウォークラリー」という五感の資料を使って、自然の場所で何を見つけましたかということもやっています。

小学校とタイアップし、「五感つうしんぼ」といって、ある時期ごとにそのクラスの五感を測り、あなたはどのような触覚タイプ、視覚偏重タイプなどという結果を子供達に戻すといったこともやりました。

NPO五環生活の方では、「まっくらカフェ」ということをやっています。ブラインドレストランというヨーロッパから入ってきたものですが、これは視覚を閉じて、その他の四感で食べてみようというものです。いろいろなやり方がありますが、視覚障害のある方がサービスする場合もあります。中国では赤外線カメラをつけて本当に真っ暗にするらしいのですが、私たちはロウソクぐらいにして目隠しをしてもらって食べてもらっています。

これは非常にシンプルですが、面白い感覚を味わえます。目を閉じてお猪口のようなもの一つ一つ素材を入れて、食べ比べてもらいます。それだけですが、一番皆さんの感想で出てくるのは、「食べる速さ」です。私たちは多分頭で食べています。つまり、このおいしいハンバーグをハンバーグだと思って口に入れていっただけで、そのお肉の固まりの味を味わっていないのです。そこで、目を閉じて、何を今自分は食べているかを意識しながら食べてみます。

余談ですが、これは食育にもとてもよいです。これで食べると、嫌いなものも食べられるようになったというのをよく聞きます。ナスやピーマンが嫌いな子供が多いですが、それは目で見て嫌がっているのだから、目を閉じてしまって口に入れてしまう。感覚でいうとこれは何かと、そこからリセットしていけます。

私たちは知らず知らずのうちに、味に集中せずに、こういうものを食べているのでおいしさに違いないということで食事の時間を終えているのではないかなと思います。だから、一個一個物を

食べ、あっ、この味ってこうなんだ、これは何だろう、コロッケ一つにしても、何が入っているのだろうかということ、ゆっくりやっています。そうすると、食べるということは非常に違う感覚だということが分かってきます。

この「まっくらカフェ」のプログラムと同時に、「まっくら遊び」ということもやっています。習字ですが、実はこれは目隠しして書いている「まっくら習字」というものです。これは「まっくら粘土」です。真っ暗な中で粘土遊びもします。子供に帰ったようにみんな喜んでいましたね。この前は、土で絵を描く「土絵の具」というものを作って絵を描いてみました。

これらは大人が中心ですが、子供のところに行って実施するものもあります。五感で刺激する方法は、単純なプログラムがたくさんありますので、「まっくらカフェ」などはご家庭でされてもとてもよいのではないかと思います。

身体への取組ということで、先ほど「近江ワザ回廊」も紹介しましたが、自転車の取組も行っております。環境によいということで自転車が追い風を受けていますが、五感の面から取り上げることも可能です。自転車は子供の発達に非常によいという評価もあります。

自転車に乗れるということは身体のバランス感覚にとって非常によいですね。これは人のライフスタイルと自転車の関係を表したのですが、まず最初、子供はこの重さのある金属で遊び始め、自転車とのつきあいがそこから始まります。それから移動のツールになって、スポーツ的に乗ることになっていきます。20代ぐらいになって、車に行ってしまったりもしますが、またお年寄りになって車に乗れなくなると自転車に戻って来たりします。

自転車とは、人生のライフサイクルにおいて様々なつきあいがあるわけですね。しかし、法律ではそれを同じ自転車として扱っているのも、とても窮屈なところがありますね。「自歩道」といって日本では歩道を自転車が走ることができるので事故が起きたりといった状況にもなっています。

これは人生のサイクルと合わせたのですが、子供のときの自転車、それがサイクリストとなったり、あるいは買い物でちょっと行ったりする。自転車とも様々なつきあい方があります。

次の「自転車生活のマスターコンセプト」の図を見ていただくと、身体との関係などがありますが、左の方に「わざ・技術」というのがありますね。皆さん、子供の頃、自転車を一度分解したくなりませんでしたか？自転車は、分解して組み立てるぐらいのことが子供にもできるいいアイテムなのです。自動車では複雑過ぎてできないですね。しかし、現在は、そういうことも世代としてしなくなっています。パンク修理さえも自分たちでできない。

自転車は、機械に触れるいいアイテムですけれども、ちょっと分解していると、親の方が「そ

んな危ないことやめなさい。」とか言って、自転車屋さんに持って行ってしまふ。もっと自分で触って、自分の身体でこんなふうにできるということをやる経験を大事にしなければなりません、そういう意味でも自転車は価値を持っていると思います。

自転車を普及していきたいのですが、車に乗っている人に自転車と言っても全く耳に入らないので、それでは琵琶湖一周ということから興味を持っていただこうということで、今、『輪の国』びわ湖」という、琵琶湖一周サイクリングの様々なプロジェクトを仕掛けています。琵琶湖一周したら認定証を授与するというのもやっています。

面白いのは、某鉄道会社が中間管理職以上の研修に琵琶湖一周を使っているというのを聞きました。チームで自転車の乗れない人とどうやったら琵琶湖一周を成し遂げられるかというのをやるそうで、そんな使い方もあるのかと思いました。

先ほどの職人に戻ります。職人さんは技を持っています。その技を持つ滋賀県内の職人さんたち取材し、ホームページに動画と記事を掲載しております。左の方はダウンロード式のペーパークラフト、右の方は87歳の桶風呂の職人さんのDVDです。これは、取材をしていたら、「じゃあ最後にお前たちへの死に土産に作ってやる」ということで急遽作ったものです。

桶風呂というのは、いわゆるビヤ樽のようなものの中に入ります。後で写真が出ますけれども、滋賀県の田舎の方で使われていて、水は上まで入れません。半蒸半浴といいまして、くるぶしぐらいまでしか水がなくて、蓋をしてサウナ状態にします。それは燃料と水をいかに少なくして風呂に入るかという、今風に言うとエコな風呂ですが、当時は貴重な水と燃料という資源を使いたくないという理由でされていたものです。

これを実際に作ってもらったのですが、このDVDを若い世代に見せるとものすごく感動します。というのは、その辺で切ってきた木から桶風呂というものができ上がるので、どうやって樽のようにわん曲させていくのかなどといった技を見ることができるからです。桶職人さんがもう87歳で引退するのですが、桶を作りたいという20代の人が出てきたので、その人をつないでいきます。

そこで大事なものは道具です。その若い桶職人さんが言うには、もう道具がない。作りたくても道具がないから、廃業する桶職人さんの道具をできたら譲り受けたいといった道具の問題もあります。職人さんたちがいなくなってしまうと道具も散逸してしまいますし、その道具を作れる人もいない。このように、身体の技というものの可能性が現在、危機に陥ってきていると思います。

「スロー人」という事業もやっています。左が桶風呂です。こんな風に本当に桶の中に入って、蓋を閉めてしまいます。真っ暗なので僕らはわくわくして入るのですが、60歳以上の人に聞くと、

あんな暗い汚い風呂は嫌だとみんな言いますね。開放的な明るいお風呂に入って、こんなにいい世界なのか思ったという話もしていました。これは民俗資料館にある、昔本当に使っていた桶風呂ですが、私たちは新しいものを作りました。

現在、桶風呂を欲しがっているのは古民家です。滋賀県も田舎居住を勧めており、そこで古民家に住みたいという人も来るのですが、問題は風呂です。こういう桶風呂に入りたいということでも注文が来ても、実はこれは値段がつけられないのです。作れる人がいないので。それではその有馬殿さんという人の最後の桶風呂を売っていいのかというのを今議論しています。ただ、職人さんとしては売りたい、売ってなんぼの世界です。飾っていても全然成り立たないのです。

先ほどの「ワザ回廊」で30人ぐらい取材しました。近江雁皮紙さんという和紙をつくっている人がいますが、市場は海外です。日本では需要がない。海外輸出がメインという話もある意味寂しいところですが、技を持つ人もいなくなるし、逆に言うと技を見る目がある人がいないというところも問題です。

彦根は仏壇が主要産業なので、仏壇職人さんにも会いましたが、みんな嘆くのは、どれだけ技を披露してもだれも分からない。だから安さで決まってしまう。「私たちはまだすごい技を持っているけれども分かってくれんのか」という嘆きをよく聞きます。そういうことも教育としては非常に重要だと思っています。

それから、田んぼのプロジェクト。これはあちこちでされていますが、面白いのは田んぼに裸足で入る感覚なのです。もちろん実際の農家の人たちにとっては、何ら珍しいものではないですね。

私たちがNPO事業としてこの田んぼ体験をやると、大阪や名古屋、東京からもわざわざ来られますが、そのこと自体が農家の人たちにとっては信じられないようです。裸足で泥に触れるという経験が日常にないし、泥と触れ合う感覚を求めているということだと思います。無農薬の田んぼとそうではない田んぼでは土が違います。それも足で入ってもらって、その粘り気というか、その粒の細やかさを足で感じてもらいます。若い世代は土の感覚を欲しがっていると思います。子供を連れてくると、ずっと転げ回って喜んでいきます。

現在は、川遊びも危ないからだめと言われるし、今度は砂場に行ったら猫のおしっこで汚いし、どこでも身体を転げ回すことができない。子供も動物ですから、机の前ばかりに座らせるのではなく、一時期野に放ってあげて、泥んこにしてあげるということは本当に大事だと思います。そこで身体感覚のリセットできますし、子供だけではなく、学生や20代、30代の人もこのような感覚を欲しています。



右端にあるのは杜氏さんです。岡村酒造という知り合いの酒蔵に入ってもらっています。ここは、ある化粧品のCMに出てくる「杜氏さんのきめ細やかさ」の杜氏さんがいるところです。そこで杜氏の体験をしてもらうのです。一泊二日で麴の部屋にも入ってもらい、自分で酒を絞ってもらいます。

面白いのは、女性の方が多いのですが、麴の部屋に入るので当然化粧はできません。金属類、化粧は全部なしです。それでも皆さんいらして、麴を手で触って酒というものを身体で感じてもらっています。

このようなプロジェクトを最近多くやっていますが、女性の方が元気です。私の大学は様々なプロジェクトを地域でやっています。今、僕が抱えているのは「一姓」という、百姓を一步から始めようというプロジェクトですが、それも女性が中心です。

もう一つ「あかりんちゅ」というプロジェクトがあります。お寺で余ったロウソクを残蠟といいますが、お寺の行事では新しいロウソクを使わなければなりませんので、使った短いロウソクは全て廃棄します。蜜燭系は業者が回収しますが、パラフィン系は全部廃棄物になり、その処理に困っているとのことなので、全部で500キロから700キロあるロウソクを引き取り、「あかりんちゅ」というチームが新たなロウソクに作り替えて、キャンドルナイトというイベントに使うということをやっています。商品開発もしていますが、そういうものは全部女子大生です。

4番目に、まちづくりへのヒントについてお話ししたいと思います。今までのまちづくり計画は、全部人の身体の違いを無視しています。人を上の目線から見て、この辺の公園で遊ぶだろうといった感じで、人の身体の違いなどは全然意識せずにまちを作ってきたのです。

私が思うに、人間の身体は適応能力が高いです。適応能力が高いから、決められた暮らし、決められたまちで住めるわけです。しかし、本当に自分の身体の声を聞いたら、まちのつくり方は違ってくると思います。動物は自分たちの身体で巣を作る場所を探しに行き、ここが心地いいなというところで巣を作り、そこから広がっていきますよね。だれも決められてそこで巣を作る鳥なんかいません。みんな自分の身体に聞きながら巣を作っているはずなんです。

しかし、人間だけは決められたところで住んでいる訳です。それは身体が何とか適応しているからですが、本当にそこで心地いいのか、本当に私たちの身体はそのまちでいいのかということを気にする時代になっているのではないかと思います。

図面に書いたまちをつくるという従来からの方法は変えていかないとはいけません。身体という言葉を使ったまちづくりをしていない。都市計画とかまちづくりに使われる言語に、身体という言葉はほとんどありません。だからまず私たちは使うボキャブラリーから見つけ出さないと

いけない。一つ目のヒントとしては、「カラダポイントを見つけましょう、そのように身体に聞いてみよう」ということを言っています。少し前に「癒し」という言葉が流行っていましたが、流行というのは恐ろしいものですぐ廃れていってしまいますが、ほっとするとか、気持ちいいとかといった言葉を大事にすることがおそらく大切になっていくのではないかと思います。

「沐浴都市」ということを以前言っていたことがありまして、沐浴と言うと、私たちの知っている日本文化では、みそぎや温泉などがありますが、森林浴というものもありますね。これを体系化していくと、この表のようにもっともっとあります。蒸気浴とか砂浴とか、私たちはこのように自然に包まれる感覚をいろいろ持っています。日光浴というものもありますが、もともと海水浴は治療から始まりました。こういうポイントをその都市の中で探して行って大事にしたい。それは必ずしも図面に出てこないところかも知れませんが、ほっとするような場所を大事にしていくことも一つのやり方かなと思います。

二つ目が、身体の違いを重んじる。先ほど言いましたように、身体に注目すると一人一人違います。障害をお持ちの方には、バリアフリーとかハンディキャップという言い方がありますが、「まっくらカフェ」では、視覚障害のある方が先生です。私たちが視覚に頼りすぎて他の四感を使ってないのに対して、視覚障害のある方たちは全然違うことが分かります。そういうことを私たちは学ばなければいけない。

匿名の「ヒト」にはしない。枠にもはめない。職人さんや高齢者を大事にする。高齢の方は実は身体の歴史なのです。身体の歴史として知っていることがたくさんあります。

滋賀県の事例でも、学識経験者に任せきりにせず、地元の人と行政の人が頑張ったところはどうまくいっている。それはなぜか。学識経験者はそのまちに住んでいないからです。その身体の作法を知らないからです。だから知識を持ってくるしかないですね。知識を持ってきて、その地域の身体の作法を無視したことを提案するので、ずれていってしまう。

まちづくりを考える時には、その場所での身体の使い方を何十年もしてきた人の言葉、やり方に耳を傾けないといけないと思います。その五感というものが、鍵や媒介になると思います。見極めるのではなく、身を極めていく。身体を開いていくというようなことだと思います。

そのやり方として注目しているのですが、琵琶湖の真ん中に沖島という島があります。淡水湖の中で日本で唯一人が住んでいる島で、その未来づくりを近江八幡市がやっているのですが、ここでは KJ 法という川喜田二郎さんの手法を使って、島民一人一人が意見を出したものを、最後まで捨てないで計画を作ります。捨てないところが大事です。一人一人が関わった計画を作る。現在一般に作られている計画は、最終的には一人一人から出された様々な意見をそぎ落して作ら

れます。一人一人の言葉を捨て去り、何となくまとめてしまいますが、捨てないことが大事だと思います。

丁稚道システムというものもまちづくりのヒントになるのではないかと思います。華道や茶道など、私たちが習っているプログラムには昇段の仕組みがありますが、まちづくりにもそういうものが色々あるはずです。そういうステップアップのプログラムも必要だと思います。

最後に、「み・つ・ば」というのが大事ではないかと思います。「み」というのは身体で、身体を使った経験を共有することが大事です。ウォーキング、ゼスチャー、踊りなどですね。「つ」の伝えるというのは、内と外に伝えなきゃいけない、回覧板などは非常によいと思います。私がいるところでも回覧板がなくなりました。自治会がなくなってしまうと、全戸直接配布です。どんどんつながるローテクなツールが現在なくなりつつあるのですが、実はそれらは大事なものだと思います。身体で話すことが大切ですよね。「ば」というのは、目的なくワイワイとする場、井戸端のようなところですね。気軽にだれもが集まれる場が必要ではないかと思います。

現在、身体、感覚、そして五感というものが、まちづくりでも重要になってきています。やはり急に入ってきてまちはつくれません。そこでの身体の使い方を大事にしながら、そこに合ったまちをどうやってつくっていくか。そのためのキーワードが感覚と五感であり、その場所での身体のボキャブラリーを大事にしていくことが今後のまちづくりにおいて大事になると思います。

以上で話を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。